

親疎上下関係による不満表明の日韓比較*

-行動主体の意識に注目して-

盧姓鉉**

〈要旨〉

本研究では、親疎上下関係による不快感、不満成立の可否と不満表明の手段(言葉/態度)、不満表現の選択における行動主体の意識に注目して日韓の不満表明を比較した。その結果、以下のことが明らかになった。

(1) 不快感は韓国より日本の方が全体的に高いが、その割合は親疎上下関係によって異なっている。日韓ともに、親しい相手より親しくない相手の方で不快感が高くなり、親しくない相手の中でも年上より同年代の方で不快感が高くなるが、親しい間柄では上下関係による不快感の違いがあまり見られない。

(2) 不満成立の段階では日本より韓国の方が親疎上下関係によって大きく影響される。目上の人には、日韓ともに不満を感じても表明しないことが多い。また、親しい友達には韓国より日本の方が不満を感じる割合が高く、その多くは言葉で不満を表明する。なお、親しくない同年代の人の場合、日本は不満を感じても表明しないことが多いが、韓国は態度で表明することが少なくない。

(3) 親しい友達に言葉で不満を表明する際、韓国は日本に比べて自分の不快な気持や状況を伝えることに気をを使うが、日本は韓国に比べて相手の気分を害さないように配慮することに比較的によく気をを使う。このような行動主体の意識の違いから、韓国は目的達成指向性が、日本は対人配慮指向性が、それぞれ強く窺われる。

(4) 目上の人に言葉で不満を表明する際、自分の不快な気持や状況を伝えることより対人配慮の方に気をを使うという点では日韓共通しているが、その割合は日本より韓国の方が高い。つまり、目上の人に言葉で不満を表明する際、韓国は日本に比べて対人配慮指向性が強く窺われる。

このような日韓の違いをお互いに理解することは、今後、日韓両国人が円滑なコミュニケーションを図る上で、何よりも重要であろう。

論文分野：社会言語学、日韓対照言語学

キーワード：不満表明、親疎上下関係、行動主体の意識、目的達成指向性、対人配慮指向性

1. はじめに

言語行動には、当該の言語行動の目的を効果的に達成しようとする「目的達成指向性」と、相手との対人関係を良好に保とうとする「対人配慮指向性」という二つの指向性がある(熊谷2000)。例えば、感謝や謝罪などのように、言語行動の目的そのものが対人関係を良好に保つことにつながる場合は、二つの指向性を両立させるのが比較的容易である。しかしながら、断りや不満表明のように対人関係を損な

* "This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government (NRF-2011-327-A00523)"

** 高麗大学校 言語情報研究所 研究教授、社会言語学・日本語教育 専攻

う恐れがある場合は、二つの指向性を両立させるのが容易とは限らない。例えば、不満表明は、相手に不満を表明するかどうかという行動遂行の可否を決定する段階から、「目的達成」と「対人配慮」という二つの指向性の両立の問題が浮かび上がってくる。相手との対人関係を良好に保つためには、たとえ不満を感じたとしてもそれを表明しないに越したことはない。にもかかわらず、不満表明を行うことにしたからには、その目的がきちんと達成されなくては意味がないので目的達成指向性が強くなるが、行動主体は相手との人間関係を良好に保つための努力も怠らないはずである。つまり、我々は言語行動を行う際、「目的達成」と「対人配慮」という二つの指向性のバランスをとりつつ、双方をなるべく満たすよう、工夫することになる。その工夫には相手との親疎上下関係などの様々な要因が関わってくるが、言語行動の対照研究に当たってはそこまで考慮に入れる必要があると思われる。

そこで、本研究では「目的達成」と「対人配慮」という二つの指向性に着目して日韓のコミュニケーション行動の特徴を明らかにしたい。具体的には、二つの指向性を両立させるための行動主体の工夫が窺いやすいと思われる不満表明の場面を取り上げ実態調査を行い、親疎上下関係による不快感、不満成立の可否と不満表明の手段、不満表現の選択における行動主体の意識に注目して分析・考察する。

2. 先行研究及び本研究の位置づけ

不満表明に関する研究は、Olshtain, E. & Weinbach, L. (1985)、初鹿野他(1996)から始まった。これらの研究は不満表明に関する先駆的な研究として意義があるが、学習者グループの母語(英語、中国語、インドネシア語など)や年齢などが多様であるため、学習者グループと母語話者グループとの違いの原因を究明するまでは至らなかった。

2000年代に入って、ミズシマ(2002)、李善姬(2006)などにより、日韓の不満表明に関する調査研究が進められた。以下に、それぞれの研究の主な成果及び特異点を簡単にまとめる¹⁾。

1) 表中の略字の意味は、次のとおりである(アルファベット順)。

・CKL：中国人韓国語学習者	・DCT：談話完成テスト(Discourse Completion Test)
・JKL：日本人韓国語学習者	・JNS：日本語母語話者
・JNSK：韓国居住の日本語母語話者	・JNSJ：日本居住の日本語母語話者
・KJL：韓国人日本語学習者	・KNS：韓国語母語話者

これらの略語は、以下の図表においても同一の意味で用いる。

〈表1〉 先行研究の資料収集方法、考察対象、主な成果及び特異点

	資料収集方法	考察の対象	主な成果及び特異点
ミズシマ (2002)	DCT	KNS/JKL/JNSの不満表明ストラテジー	・JKLはJNSより不満度が高いが、婉曲な表現で不満を表明することが多い。
李善姬 (2006)	DCT	KNS/JNSの不満表明ストラテジー	・JNSはKNSより間接的に不満を表明する。
洪珉杓 (2006)	DCT	KNS/JNSの不満表明ストラテジー	・JNSはKNSより間接的に不満を表明する。 ・ストラテジーの選択基準として、JNSは社会的な役割や親疎関係、KNSは年齢による上下関係が影響する。
朴承圓 (2007)	DCT	KNS/KJL/JNSの不満表明ストラテジー	・不満度はJNS>KJL>KNSの順で高い。 ・JNSはKNSよりFT度(the degree of face-threat)の低いストラテジーを使用する。
チェミョンソン (2007)	DCT	KNS/JKL/CKLの不満・不満応答ストラテジーと文末待遇法	・KNS/JKL/CKLの不満ストラテジーの選択に親疎上下関係が影響する。 ・文末待遇法の選択に、KNSは親疎関係より上下関係、JKL/CKLは上下関係より親疎関係が影響する。
宋蓮姬 (2008)	ドラマシナリオ	KNS/JNSの不満・不満応答ストラテジー	・日韓のドラマシナリオを考察データとする。 ・上下関係による不満ストラテジーの相違は見られない。
国生 (2009)	DCT&選択式のアンケート	KNS/JNSの不満表明ストラテジー	・公共の場面と私的な場面、一人である場合と親しい人と一緒にいる場合、一緒にいる人との上下関係などを考慮して調査・分析を行う。 ・公共の場面では日韓ともに積極的なストラテジーを使う。 ・私的な場面では親しい友達だからこそはっきり言えない日本人、親しいからこそはっきり不満を言う韓国人、それぞれの傾向が見られる。
ホンダ他 (2009)	DCT	KNS/JNSJ/JNSKの不満表明ストラテジー	・KNSはJNSJやJNSKより多様なストラテジーを用いる。 ・場面によってJNSKはJNSJよりKNSに近い傾向が見られる。

このような先行研究は量的にも質的にも成果を挙げているが、次のような問題点及び課題を孕んでいる。

- (a) 資料収集方法がDCTに偏っている。
- (b) 考察の対象がストラテジーに偏っている。
- (c) 異なる事柄に対する不満表明の相違を、親疎上下関係によるものと解釈していいのか。

(a)については、先行研究の考察データのほとんどが、行動遂行の可否や手段(言葉/態度)、言語形式などを問うDCTによるものである。DCTは当該の言語行動が予想される場面を設定し、場面ごとに話者の内省を問うものであり、一定の設問に対して多数の回答が得られ、その回答が数量化できるので、全体の傾向を把握する上で有効である。しかし、DCTは一定の設問に対して得られた回答を突っ込むような質問ができないし、あくまでも意識調査であるため、その回答に実態がどの程度反映されているかという疑問が残る。このような問題を解決するためには、面接調査などの質的調査を行うことによってDCTの限界を補う必要があると思われる。

(b)については、〈表1〉に示したように、先行研究の考察の対象は不満表明のストラテジーに偏っている。不満表明ストラテジーを効果的に運用することは円滑な対人関係の維持に関わることから、このような研究は有意義かつ究明の急がれるものである。しかし、不満表明の全体像を解明するためには、表面に現れる言語表現やストラテジーだけでなく、そうした表現行動の背景にある行動主体の意識や非言語行動も考察の範囲に入れる必要があると思われる。

(c)については、異なる事柄に対する不満表明の相違を、親疎上下関係によるものと解釈している研究が少なくない。たとえば、チェミョンソン(2007)では、〈親しい社長が連絡もなく会議に参加しなかった場合(上)〉、〈親しいルームメイトがあなたとの共同の部屋に友達を招待してうるさくしている場合(同)〉、〈親しい後輩にあなたの本を貸したが、その本を無くした場合(下)〉のそれぞれの場面での不満表明ストラテジーの使用分布の違いを上下関係によるものと解釈している。しかし、この違いには上下関係だけでなく、不満を起こした事柄が影響を及ぼす可能性もあるのではないかと思われる。つまり、親疎上下関係による不満表明の相違を明らかにするためには、考察データにおいて不満を起こした事柄などの他の要素を統制する必要があると思う。

そこで、本研究ではこの三つの問題点を踏まえ、親疎上下関係による不快感、不満成立の可否と不満表明の手段、不満表現の選択における行動主体の意識に注目して日韓の不満表明の特徴を明らかにしたい。このような研究成果はストラテジーを中心とした先行研究の成果をバックアップするとともに、コミュニケーション行動の研究領域の更なる発展にも役立つものと考えられる。

3. 調査の概要及び用語の概念

3.1. 調査の概要

本調査は「不満表明及びその応答」における日韓コミュニケーション行動や行動意識の特徴を把握し、日韓対照研究の基礎資料を得ることを目的とする。そのため、日本在住の経験のある韓国人5名、韓国在住の経験のある日本人5名を対象に予備調査を行い、日本と韓国の不満表明及びその応答行動の傾向を把握し、調査票の設計に必要な情報を得た²⁾。

本調査では、〈親疎上下関係による不満表明〉〈親疎上下関係による「不満に対する応答」〉〈親友に対

2) 予備調査では、大塚(2004)で日韓の相違が見られた場面を取り上げ、不快感と不満事項(事柄)及びその理由などについても意見を交わし、本調査の場面や設問の作成に参考にした。

する不満表明)についての設問を設け、量的調査のDCT(所要時間:約20分)と質的調査のグループ式面接調査(所要時間:一グループ当り約40分)³⁾を行った。調査時期は2011年10月から2012年2月、調査地域はソウルと東京近辺である。調査対象は日韓の大学生、年齢は20代、人数は以下のとおりである。

〈表2〉 調査対象の人数

(単位:人)

	JNS	KNS	KJL	合計
DCT	156	162	110	428
グループ式の面接調査	30	30	30	90

本稿では今回の調査の中で日本人(JNS)と韓国人(KNS)を対象にした〈親疎上下関係による不満表明〉に関わるDCTの回答だけを分析の対象とし、その結果をグループ式面接調査で得られたコメントを参考にして考察する。以下に、本稿で分析の対象とするDCTの場面及び設問の一部を示す。

〈表3〉 調査票例

※ 〈状況1〉の下で、自分ならどのように考えてどのように行動するか、実際の自分の考えや行動を記入してください。

〈状況1〉

あなたは自分の好きな本をBさんに貸しました。実は、好きな本なのであまり貸したくなかったのですが、Bさんがどうしてもというので貸しました。数日後、Bさんにその本を返してもらいました。Bさんと話しながら何気なくその本を開いてみたところ、飲み物でちょっと汚れているところがあることに気づきました。

1. 状況1で Bが 親しい友だちである場合

(1) あなたの気持はどうですか。

- ① 全然不快ではない ② 不快ではない ③ なんとも思わない ④ 少し不快だ ⑤ とても不快だ

↓

↓

(①で ④か ⑤を選択した方のみ)状況1で不快だったら親しい友だちに対するあなたの行動は?

- ① 言葉で不満を言う。
② 言葉では言わないが、態度(表情など)で示す。
③ (不快ではあるが) 何も言わないし、態度でも示さない。

(2) 状況1で親しい友だちに言葉で不満を表明するとしたら、どのように言いますか。

(

)

↓

3) 今回のグループ式面接調査は、普段付き合ひのある者同士6名を一つのグループにして、調査者が投げかけた質問に対してお互いに話し合う形で行った。質的調査としてグループ式の面接調査を行った理由は、一対一の面接調査に比べて次のような利点が期待されるからである(尾崎他(2006:15))。まず、参加者が知り合いと一緒にいることでリラックスすることができ、より自然な回答が得られる。また、他者の回答が刺激となってより多様な回答が引き出される点、調査時間が短縮できる点でも今回の調査に適していると考えた。

☞ あなたが上記のことを言う時、一番気にすることに○をつけて下さい。

- ① 汚れている部分をどうにかしてくれるように
- ② 不快な気持や状況が相手に伝わるように
- ③ 自分の印象が悪くならないように
- ④ 相手の気分を害しないように
- ⑤ 相手から反感をかかわないように
- ⑥ その他(簡単に記入してください：)



実際、上記のことは言いつらいですか?

- ① 言いつらい
- ② 言いつらくない
- ③ 言いやすい

〈状況1〉の不満相手(B)としては、親疎上下関係を考慮して、①親しい友達 ②同じ授業を取っている親しくない(面識だけある)同年代の人 ③親しい教授 ④親しくない(面識だけある)教授、という4名を設定して同様の質問に答えてもらった。これを本研究の主な考察データとする。

3.2. 不満表明とは

不満表明とは、ある種の行動期待や当然とみなされる文化規範に反するような好ましくない状況に置かれた際に、或は相手から不利益を受けた際に、そのことに対する否定的な評価を相手に伝えることである(初鹿野他(1996)、藤森(1997)、山岡他(2010)など)。これはB&L(1983)のFTA(相手のフェイスを脅かす行為)に当り、人間関係を損なう恐れがあるため、Leech(1983)のポライトネスの原理(politeness principle)の中の是認の原則(approbation maxim)の「他者への非難を最小限にせよ」のように、誰しもなるべく行いたくないものである。だが、日常生活では何らかの目的や必要に迫られてやむをえず不満表明を行うことも少なくない。例えば、相手が不利益を与えたことに気づいていない時にそれを気づかせたいとか、相手の謝罪が足りない時に相手の謝罪を引き出したいなどの欲求が喚起される場合である。

行動主体がFTAに当たる不満表明をあえて行うことにしたからには、一方ではその目的(行動意図)を達成するために努力するはずであるが、他方では相手との関係を良好に保つための努力も怠らないはずである。つまり、行動主体は不満を表明する際、心的状況や相手との親疎上下関係などの様々な要因を考慮して、「目的達成」と「対人配慮」という言語行動の二つの指向性を調節し、「不満表明をするか否か」「もしするなら言葉ですか表情・態度ですか」「どのような言語表現を使うか」などを決めていくわけである。したがって、不満表明には「どうすれば相手との人間関係を良好に保ちながら自分の不満を効果的に伝えられるか」という、行動主体の工夫が凝縮されていると思われる。この行動主体の工夫の仕方における日韓の違いを明らかにすることは、日本人と韓国人のコミュニケーション行動についての理解を深める上で最も重要なものであり、日韓の異文化コミュニケーション及び異文化教育においても欠かせないものであると思う。

そこで、本稿では、親疎上下関係による不快感、不満成立の可否と不満表明の手段、不満表現の選択における行動主体の意識に注目して日韓の相違を分析し、「目的達成」と「対人配慮」という言語行動

の指向性からの考察を試みたい。

4. 分析と考察

本章ではDCT調査の中で〈状況1.返してもらった本が汚されている場合〉の不満相手(B)として、①親しい友達 ②同じ授業を取っている親しくない(面識だけある)同年代の人 ③親しい教授 ④親しくない(面識だけある)教授、という4名を設定し、それぞれの場面の結果をもとに集計表を作成する。そして、不快度、不満成立の可否と不満表明の手段、不満表現の選択における行動意識、という三つの側面における日韓の違いを考察していきたい。また、考察に当たっては、グループ式面接調査で得られたコメントを「」で示して参考にする。なお、データの集計や分析にはPASW Statistics18を用いる。

4.1. 不快度

好きな本を汚されて喜ぶ人はいないはずだが、汚した人が親しい友達の場合と親しくない人の場合とでは、その不快度や不満表明の仕方は異なってくると思われる。そこで、まず、本調査では返してもらった本が汚されている場合の気持を尋ねた。その回答を「全然不快ではない→1点」「不快ではない→2点」「何とも思わない→3点」「少し不快だ→4点」「とても不快だ→5点」に数値化して、相手ごとにその平均値を計算してみたが、その結果が〈表4〉である⁴⁾。

〈表4〉相手ごとの不快度

	親/同	疎/同	親/上	疎/上
JN/S	3.91	4.31	3.85	4.16
KNS	3.60	4.28	3.54	3.96

〈表4〉を見ると、全ての数値が3点を越えていることから、〈状況1〉は相手が誰であろうと不快に思われるが、その不快の度合いは相手との親疎上下関係や日韓で異なっていることがわかる。まず、親疎上下関係による不快度の違いを高い順に示すと、日韓ともに「疎/同」疎/上>親/同>親/上」である。親疎上下関係で不快度に差があるかについてt検定を行ったところ、「親/同」と「疎/同」(日本:t=-5.910, df=155, p<.05. 韓国:t=-9.498, df=161, p<.05)、「親/上」と「疎/上」(日本:t=-4.310, df=155, p<.05. 韓国:t=-7.408, df=161, p<.05)、「疎/同」と「疎/上」(日本:t=2.014, df=155, p<.05. 韓国:t=6.074, df=161, p<.05)それぞれの平均値には有意差が見られた。だが、「親/同」と「親/上」との平均値には日韓ともに有意差が見られなかった(日本:t=.774, df=155, n.s. 韓国:t=1.066, df=161, n.s.)。この結果と平均値を見ると、日韓ともに親しい相手より親しくない相手の場合に不快度が高くなり、親しくない相手の中

4) 表中の略語は次のような意味である。

- 親/同: 親しい友達
- 疎/同: 同じ授業を取っている親しくない(面識だけある)同年代の人
- 親/上: 親しい教授
- 疎/上: 親しくない(面識だけある)教授

以下の図表や記述においても同一の意味で略語を用いる。

でも年上の相手より同年代の相手の場合に不快度が高くなると解釈することができるが、親しい間柄では上下関係による不快度の違いは認めがたいと言えよう。

次に、日韓で不快度に差があるかどうかについてt検定を行ったところ、疎/同では有意差が見られなかったが($t=-.276$, $df=316$, n.s.)、親/同、親/上、疎/上では有意差が見られた(親/同: $t=-2.707$, $df=316$, $p<.05$ 親/上: $t=-2.963$, $df=316$, $p<.05$ 疎/上: $t=-1.978$, $df=316$, $p<.05$)。この結果と平均値を見ると、親/同、親/上、疎/上の場合、日本は韓国より不快度が高いと解釈することができるが、疎/同では日韓で不快度の違いは認めがたい。

つまり、不快度は韓国より日本の方が全体的に高いが、その割合は親疎上下関係によって異なっている。日韓ともに親しい相手より親しくない相手の方で不快度が高くなり、親しくない相手の中でも年上より同年代の方で不快度が高くなるが、親しい間柄では上下関係による不快度の違いがあまり見られない。

4.2. 不満成立の可否と不満表明の手段

返してもらった本が汚されている場合、不満を感じるかどうかという「不満成立の可否」、もし不満を感じるとしたらその不満を表明するか否か、もし表明するとしたら言葉であるか態度であるかという「不満表明の手段」について見てみよう。〈表5〉〈表6〉は集計の結果を相手ごとにまとめたものである⁵⁾。

〈表5〉 不満成立の可否と不満表明の手段：日本側 単位:人(%)

		親/同	疎/同	親/上	疎/上
不 満 を	感じない	24(15.4)	16(10.3)	28(17.9)	21(13.5)
	言葉で表明	84(53.8)	32(20.5)	38(24.4)	29(18.6)
	態度で表明	7(4.5)	31(19.9)	12(7.7)	29(18.6)
	表明しない	41(26.3)	77(49.4)	78(50.0)	77(49.4)
合計		156(100)	156(100)	156(100)	156(100)

〈表6〉 不満成立の可否と不満表明の手段：韓国側 単位:人(%)

		親/同	疎/同	親/上	疎/上
不 満 を	感じない	51(31.5)	20(12.3)	57(35.2)	43(26.5)
	言葉で表明	65(40.1)	35(21.6)	13(8.0)	8(4.9)
	態度で表明	8(4.9)	54(33.3)	11(6.8)	20(12.3)
	表明しない	38(23.5)	53(32.7)	81(50.0)	91(56.2)
合計		162(100)	162(100)	162(100)	162(100)

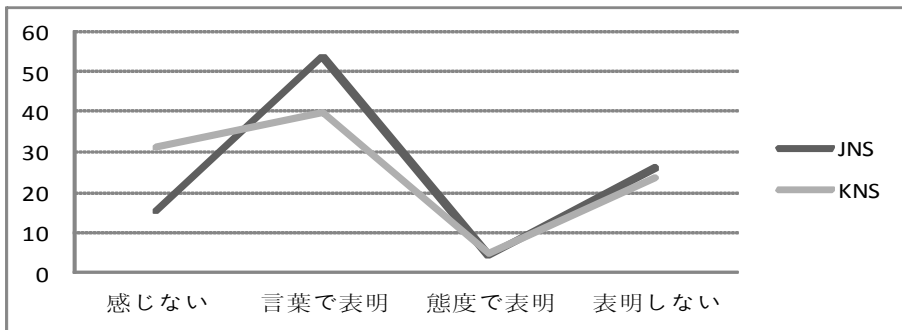
まず、不満を感じない割合を中心に日本と韓国の傾向を比較すると、親/同、親/上、疎/上の場合、不満を感じない割合は日本より韓国の方が高い。すなわち、不満を感じるかどうかという不満成立の段階から日韓の相違が見られ、目上の人や親しい友達には韓国より日本の方が不満を感じる人が多い。面接調査によると、韓国では「KNS-1-2 친한 사이나 윗사람이라면 그렇게 기분 나쁘진 않을 거 같은데...근데 친하지 않은 동년배라면 기분 나쁘죠(親しい人や目上の人ならそれほど不快ではないが、親しくない同年

5) 〈表5〉〈表6〉の中の「不満を感じない」というのは、〈表3〉の「あなたの気持はどうですか」の選択肢の中で、①全然不快ではない、②不快ではない、③なんとも思わない、という三つの回答数を合わせたものである。

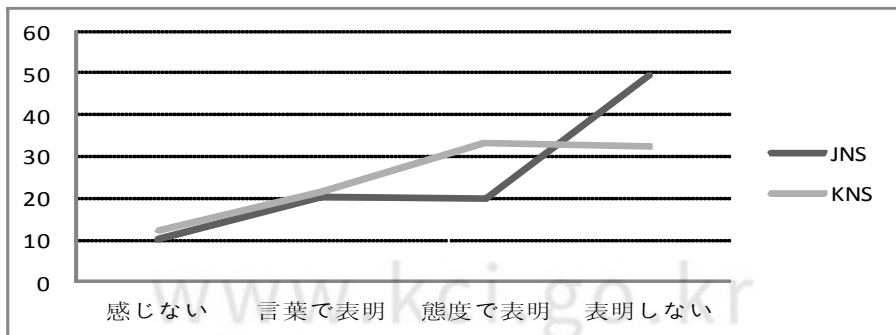
代の人だったら不快ですね)」のような意見が多く、同一の状況であって目上の人や親しい人なら不満を感じない傾向があり、不満成立に親疎上下関係が影響を与えていると思われる。しかし、日本では「JNS-2-2 四人とも不快ですね」「JNS-4-4 汚されたことというより、それを言わない、謝らないというのが、非常識っていうか、無礼って感じがしますね」というような意見も多く見られ、親疎上下関係より「相手が前もって謝らなかったこと」の方が不満成立に大きく影響していると思われる。

次に、不満を感じた場合の不満表明の手段を見てみることにする。〈表5〉を中心に日本側の傾向を見ると、返してもらった本が汚されている場合、親/同には約5割の人が不満を言葉で表明するが、疎/同、親/上、疎/上には約5割の人が不満を感じても表明しないことが分かる。同一の場面で韓国側の傾向を示した〈表6〉を見ると、親/同には約4割の人が不満を言葉で表明するが、疎/同には不満を態度で示すか、或は、表明しない割合が高く(約3割ずつ)、親/上、疎/上には約5割の人が不満を感じても表明しないことが分かる。面接調査でも「KNS-5-3 기분 나쁘더라도 위사람한테는 말하기 힘들죠(不快でも目上の人には言いたいですね)」「JNS-4-4 言いづらいですね」というような意見が多かった。つまり、目上の人には不満を感じても表明しない傾向があるという点で日韓共通していると言えよう。不満表明の手段における日韓の相違は目上の人より同年代の方で多く見られる。同年代(親/同、疎/同)の場合の日韓の相違を分かりやすく示したのが〈図1〉〈図2〉である。

〈図1〉「親/同」に対する不満成立の可否と不満表明の手段 (単位：%)



〈図2〉「疎/同」に対する不満成立の可否と不満表明の手段 (単位：%)



〈図1〉のように、親/同に対して不満を感じない割合は日本より韓国の方が高い点、不満を感じた場合は日韓ともに言葉で表明することが多いがその割合は韓国より日本の方が高い点、この二つに日韓の相違が見られる。韓国の面接調査においては、「KNS-2-5 절친이라면 상관없죠 뭐...(親友なら平気です...)」という意見が多い。そうすると、今回の結果は、「韓国人は日本人に比べて親しい間柄なら許容される行動範囲が広い」という従来の日韓言語行動の研究成果(生越(2008),盧姓鉉(2009)など)を、不満表明という新たな行動の側面から裏付けるものと言えよう。

一方、疎/同の場合は〈図2〉から分かるように、不満を感じない割合が約10%ぐらいで、不満を言葉で表明する割合も約20%ぐらいに止まっている点では日韓共通しているが、不満を態度で表明する割合は日本より韓国の方が高い点、不満を感じるが表明しない割合は韓国より日本の方が高い点、この二つに日韓の相違が見られる。面接調査でも「KNS-1-4 기분 나쁘죠...근데 말하긴 뭐하죠...아마 기분 나쁜 티는 낼 거 같은데...(不快ですね...でも言いづらいですね...たぶん態度には出るとは思いますが...)」「JNS-2-5ひどい...でも言いづらい。表情に出るかも知れないけど...でも...やっぱり相手が言うまで待ちますね...」というような意見が多かった。つまり、不快で言いづらいという感覚では日韓共通しているが、日本は表明しない方が多く、韓国は態度で表明する方も少なくない。

以上から、不満成立の段階では日本より韓国の方が親疎上下関係に大きく影響されると言えよう。目上の人には日韓ともに不満を感じても表明しないことが多い。また、親しい友達には韓国より日本の方が不満を感じる割合が高く、その多くは言葉で不満を表明する。なお、親しくない同年代の人の場合、日本は不満を感じても表明しないことが多いが、韓国は態度で表明することが少なくない。

4.3. 不満表現の選択における行動意識

今回の調査では不満表現の選択における行動意識について調べた。調査では、〈状況1〉のように好きな本を汚された時、言葉で不満を表明するとしたら何を一番気にするかを尋ね、「①汚れている部分をどうかしてくれるように⁶⁾」「②不快な気持や状況が相手に伝わるように」「③自分の印象が悪くならないように」「④相手の気分を害さないように」「⑤相手に反感をかわないように」「⑥その他」という6つの選択肢の中で選んでもらった。〈表7〉〈表8〉はその結果である。表には6つの選択肢で集計した結果をそのまま示すが、分析の観点を明確にするため、言語行動の目的達成指向性が窺われるもの(①②)と対人配慮指向性が窺われるもの(③④⑤)に分けて算出した結果も示し⁷⁾、分析を進めていく。

6) 「①汚れている部分をどうかしてくれるように」とは、例えば、「新しい本を買ってもらおう」とか「お金で弁償してもらおう」ことである。これについては、調査の際、口頭で説明した。

7) 以下の図表では言語行動の目的達成指向性を「目的」、対人配慮指向性を「配慮」と略して示す。

〈表7〉 不満表現の選択における行動意識：日本側

単位:人(%)

		親/同	疎/同	親/上	疎/上
目的	汚れている部分をどうかしてくれるように	2(1.3)	11(7.7)	7(5.1)	15(10.9)
	不快な気持や状況が相手に伝わるように	48(32.2)	51(35.9)	26(18.8)	38(27.7)
	小計	50(33.5)	62(43.6)	33(23.9)	53(38.6)
配慮	自分の印象が悪くならないように	13(8.7)	25(17.6)	20(14.5)	19(13.9)
	相手の気分を害さないように	55(36.9)	33(23.2)	54(39.1)	41(29.9)
	相手に反感をかわないように	14(9.4)	12(8.5)	18(13.0)	19(13.9)
	小計	82(55.0)	70(49.3)	92(66.6)	79(57.7)
その他		17(11.4)	10(7.0)	13(9.4)	5(3.6)
合計		149(100)	142(100)	138(100)	137(100)

〈表8〉 不満表現の選択における行動意識：韓国側

単位:人(%)

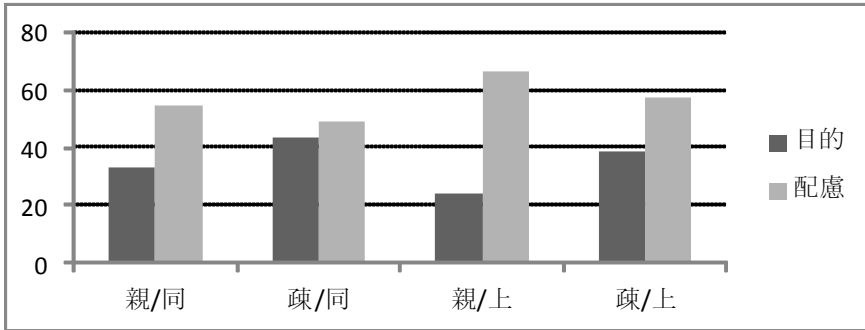
		親/同	疎/同	親/上	疎/上
目的	汚れている部分をどうかしてくれるように	3(1.9)	8(5.4)	7(5.0)	10(7.5)
	不快な気持や状況が相手に伝わるように	72(45.6)	70(47.0)	18(12.9)	27(20.3)
	小計	75(47.5)	78(52.4)	25(17.9)	37(27.8)
配慮	自分の印象が悪くならないように	6(3.8)	23(15.4)	37(26.4)	29(21.8)
	相手の気分を害さないように	40(25.3)	31(20.8)	50(35.7)	42(31.6)
	相手に反感をかわないように	22(13.9)	10(6.7)	17(12.1)	15(11.3)
	小計	68(43.0)	64(42.9)	104(74.2)	86(64.7)
その他		15(9.5)	8(5.4)	11(7.9)	10(7.5)
合計		158(100)	149(100)	140(100)	133(100)

〈表7〉から日本側の傾向をみると、不満を表明する時、疎/同には「不快な気持や状況が相手に伝わるように」することを一番気にするが、それ以外の相手には「相手の気分を害さないように」することを一番気にしていることが分かる。つまり、日本は不満表現を選択する際、相手の気分を害さないようにすることを一番気にするが、親しくない同年代の人には不快度が高いだけあって自分の不快な気持や状況を相手に伝えることにも気を使っていると言える。

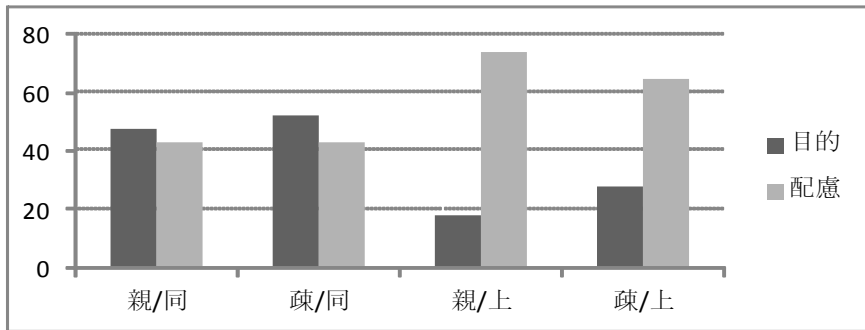
〈表8〉から韓国側の傾向をみると、不満を表明する時、同年代(親/同、疎/同)には「不快な気持や状況が相手に伝わるように」することを一番気にするが、目上の人(親/上、疎/上)には「相手の気分を害さないように」することを一番気にしていることが分かる。つまり、韓国は不満表現を選択する際、同年代の人には自分の不快な気持や状況を相手に伝えることに気を使うが、目上の人には相手の気分を害さないようにすることを一番気にしており、上下関係が大きく影響していると思う。

一方、人間関係を損なう恐れがある不満表明を敢えて行うことにしたからには、不満表明の目的をも達成しようとするはずである。だが、この目的達成指向性を無理やり行動の全面に出し放しだと、それこそ人間関係は損なわれてしまうので、行動主体は何らかの形で対人配慮指向性を表出して、両者のバランスをとろうとするはずである。このような状況で目的達成指向性と対人配慮指向性の中でどちらかをもっと気にするということは、不満表明や行動意識における日韓の相違を理解する上で欠かせない部分であると思われる。そこで、相手ごとに現われた言語行動の指向性(「目的」「配慮」)を考察することにするが、その割合を明確に示すために図式化したのが〈図3〉〈図4〉である。

〈図3〉目的達成指向性と対人配慮指向性の割合：日本側（単位：％）



〈図4〉目的達成指向性と対人配慮指向性の割合：韓国側（単位：％）



〈図3〉と〈図4〉を見比べると、親/同、疎/同の場合、「目的」と「配慮」の割合が逆転しており、日本は「配慮」の方が高いが、韓国は「目的」の方が高い。特に、親/同の場合、日韓の差が大きい。親しい友達に不満表明をする際、韓国は日本に比べて自分の不快な気持や状況を伝えることに気を使うなど、目的達成指向性が強く窺われるが、日本は韓国に比べて相手の気分を害さないように配慮することに気を使うなど、対人配慮指向性が強く窺われる点に日韓の相違がある。つまり、親しい友達に不満を表明する時、韓国人は自分の不快な気持や状況を伝えることに気を使うなど、目的達成指向性が強くなり、はっきり不満を言うことになるが、日本人は相手の気分を害さないように配慮することに気を使うなど、対人配慮指向性が強くなり、不満をはっきり言えなくなると言えよう。

一方、親/上、疎/上の場合、「目的」より「配慮」の方が高いという点では日韓共通しているが、日本より韓国の方が「目的」は少し低くて「配慮」は少し高い傾向を見せている。つまり、目上の人に不満表明をする際、韓国は相手の気分を害さないようにすることにもっと気を使うなど、対人配慮指向性が日本に比べて強く窺われる。目上の人に対する日本人の行動を見て「敬意が足りない」と感じる韓国人が少なくないが、これは行動意識や言語行動の指向性における日韓の相違と関わりがあるかも知れない。

以上、言葉で不満を表明する時に何を一番気にするかという行動意識について見てきたが、相手との親疎上下関係によってその行動意識に日韓の相違のあることが明らかとなった。また、この行動意識の相違から言語行動の指向性の違いも窺うことができた。

5. 終わりに

本稿では親疎上下関係による不快感、不満成立の可否と不満表明の手段、不満表現の選択における行動主体の意識に注目して日韓で比較した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 不快感は韓国より日本の方が全体的に高いが、その割合は親疎上下関係によって異なっている。日韓ともに、親しい相手より親しくない相手の方で不快感が高くなり、親しくない相手の中でも年上より同年代の方で不快感が高くなるが、親しい間柄では上下関係による不快感の違いがあまり見られない。
- (2) 不満成立の段階では日本より韓国の方が親疎上下関係によって大きく影響される。目上の人には日韓ともに不満を感じても表明しないことが多い。また、親しい友達には韓国より日本の方が不満を感じる割合が高く、その多くは言葉で不満を表明する。なお、親しくない同年代の人の場合、日本は不満を感じても表明しないことが多いが、韓国は態度で表明することが少なくない。
- (3) 親しい友達に言葉で不満を表明する際、韓国は日本に比べて自分の不快な気持や状況を伝えることに気を使うが、日本は韓国に比べて相手の気分を害さないように配慮することに比較的によく気を使う。このような行動主体の意識の違いから、韓国は目的達成指向性が、日本は対人配慮指向性が、それぞれ強く窺われる。
- (4) 目上の人に言葉で不満を表明する際、自分の不快な気持や状況を伝えることより対人配慮に気を使うという点では日韓共通しているが、その割合は日本より韓国の方が高い。つまり、目上の人に言葉で不満を表明する際、韓国は日本に比べて対人配慮指向性が強く窺われる。

以上、親疎上下関係による不満表明について行動意識に注目して日韓で比較した結果、不満成立、不満表明の手段、不満表現の選択における日韓両国人の意識にはっきりした違いのあることが明らかとなった。このような日韓の違いをお互いに理解することは、今後、日韓両国人が円滑なコミュニケーションを行う上で、何よりも重要であろう。

今回の分析結果は「好きな本を汚された時」という一つの不満事項から得られたものであるが、不満表明は不満を起こした事柄によって影響される可能性があるので、今回の考察結果が日韓の不満表明の全体をカバーするものとは言いがたい。今回の考察結果を一般化するためには、不満事項という要素を軸にした更なる考察が必要であろう。また、本研究の結果、親しい友達には日韓ともに言葉で不満を表明することが多いことが明らかになったが、実際どのような表現が使われているのかについての検討までには至らなかった。なお、不満表明のメカニズムを解明するためにはその応答行動についての考察も欠かせないものであろう。これらについては、紙幅の関係上、稿を改めて論じたい。

【参考文献】

- 미즈시마히로코(2003) 한국어불평화행의 중간언어적 연구, 이화여자대학교 교육대학원, 석사학위논문
- 송연희(2008) 不満表現と応答に関する日・韓対照研究, 한국외국어대학교 석사학위논문
- 최명선(2007) 한국어 불평·응답 화행의 양상과 교육 방안 연구 -한국인 모어 화자와 일본인, 중국인 학습자의 담화 분석을 중심으로-, 고려대학교 교육대학원 석사학위 논문
- 혼다 토모쿠니·김인규(2009) 「한국어·일본어 불평 화행의 비교 문화 화용론적 연구」 『국제어 문』 4, 국제어문학회 pp.5-44
- 李善姬(2006) 「日韓の〈不満表明〉に関する一考察 -日本人学生と韓国人学生の比較を通して-」 『社会言語科学』 8-2 社会言語科学会 pp.53-64
- 生越直樹(2008) 「相手所有物を使う際の言葉の有無に関する日韓比較」 『対人行動の日韓対照研究 - 言語行動の基底にあるもの』 ひつじ書房 pp.31-59
- 大塚徹(2004) 「日本人と韓国人の不快感の比較」 『専修国文』 75 専修大学日本語日文学会 pp.25-37
- 尾崎喜光(2006) 「依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」 『言語行動における「配慮」の諸相』 くろしお出版 pp.89-114
- 熊谷智子(2000) 「言語行動分析の観点—「行動の仕方」を形づくる諸要素について—」 『日本語科学』 7 国立国語研究所 pp.95-112
- 国生和美(2009) 「不満表明のストラテジー：日本語母語話者と韓国語母語話者の言語行動比較」 카トリック대학교大学院修士学位論文
- 盧姓鉉(2009) 『日韓コミュニケーション行動の対照研究 -貸し借り行動・意識に関する調査結果に基づいて-』 東京大学大学院総合文化研究科博士論文
- 朴承圓(2007) 「韓国人日本語学習者の不満表明行為の特徴-被言語行動を含む不満の表し方を中心に-」 『Foreign Languages Education』 14-3 한국외국어교육학회 pp.367-383
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」 『日本語教育』 88 日本語教育学会 pp.128-139
- 洪珉杓(2006) 「日韓両国人の言語行動の違い④不満表現のストラテジーに関する日韓比較」 『日本語学』 25-9 明治書院 pp.86-95
- _____(2007) 『日韓の言語文化の理解』 風間書房 pp.86-95
- Brown,P. and Levinson,S.(1987) Politeness: Some universals in language usage. Cambridge University Press.
- Leech,J.N.(1983) Principles of Pragmatics. Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳(1987) 『語用論』 紀伊国屋書店)
- Obana,Yasuko(2000) Japanese as a language of uchi and soto. Understanding Japanese. Kuroshio pp.187-269
- Olshtain,E. and Weinbach,L.(1985), Complaints: A Study of Speechact Behavior among Native and nonnative Speakers of Hebrew. The Pragmatic Perspective. John Benjamins publishing Company.

〈 요 지 〉

친소상하관계에 따른 불만표명의 한일비교

-행동주체의 의식에 주목하여-

본 연구에서는 친소상하관계에 따른 불쾌도, 불만성립과 표명수단(언어/태도), 불만표현 선택의 세 가지 측면을 행동주체의 의식에 주목하여 한일 비교했다. 분석결과를 정리하면 다음과 같다.

(1) 불쾌도는 한국보다 일본이 전반적으로 높지만, 그 비율은 친소상하관계에 따라 다르게 나타났다. 한일 모두 친한 사람보다 친하지 않은 사람의 경우에 불쾌도가 높게 나타났고, 친하지 않은 사람 중에서도 손윗사람보다 동년배의 경우에 불쾌도가 높게 나타났다. 하지만, 친한 사이에서는 상하관계에 따른 불쾌도 차이가 거의 없었다.

(2) 불만성립단계에서는 일본보다 한국이 친소상하관계에 영향을 받는다. 윗사람에게는 불만을 느끼더라도 한일 모두 표현하지 않는 경우가 많다. 친한 친구에게는 한국보다 일본이 불만을 느끼는 비율이 높았고, 그 대부분은 말로 불만을 표현했다. 친하지 않은 동년배의 경우, 일본은 불만을 느끼더라도 표현하지 않는 경우가 많지만, 한국은 불만을 태도로 나타내는 경우가 많다.

(3) 친한 친구에게 말로 불만을 표명할 때, 한국은 일본에 비해 불만사항 전달을 가장 우선적으로 고려하는 하지만, 일본은 한국에 비해 상대방의 기분이 상하지 않도록 하는 것을 가장 우선적으로 고려함을 알 수 있었다. 이러한 행동주체의 의식차를 통해, 한국의 목적달성지향적 성향과 일본의 대인배려지향적 성향을 엿볼 수 있다.

(4) 윗사람에게 말로 불만을 표명할 때는, 한일 모두 불만사항 전달 보다 대인배려를 우선적으로 고려한다. 하지만 한국은 일본에 비해 상대방의 기분이 상하지 않도록 하는 것을 가장 우선적으로 고려하는 등 대인배려지향적 성향이 높게 나타났다.

이러한 분석결과와는 향후 양국민의 원활한 커뮤니케이션 도모 및 이문화 커뮤니케이션 교육에 매우 유용할 것이다.

논문분야 : 사회언어학, 한일대조언어학

키 워 드 : 불만표명, 친소상하관계, 행동주체의 의식, 목적달성지향성, 대인배려지향성

■ 노주현 (盧 姓 鉉)

고려대학교 언어정보연구소 연구교수

chel99@hanmail.net

- 投 稿 日 : 2012년 6월 20일
- 審 査 開 始 : 2012년 7월 20일
- 審 査 完 了 : 2012년 8월 20일
- 揭 載 確 定 : 2012년 8월 22일